

## IN THIS ISSUE:

### Hot Issue

## 「みんなの学校プロジェクト」ブルキナファソのインパクト分析

JICA事業の効果を学術的に検証する研究プロジェクトの代表者を務める澤田康幸客員研究員に話を聞きました。調査を開始するブルキナファソを訪れた同研究員は、「現場の経験知を国際公共財として積極的に対外発信していくという視点に立った、前向きな研究を目指したい」と抱負を語ります。

[READ MORE](#)



ブルキナファソの子どもたち

写真: 今村健志朗 (JICA)

### Reviews

## 古川上席研究員が、今後の開発援助戦略について発表

フランス開発庁とドイツ技術協力公社が主催する「開発援助における多様性と補完性に関するセミナー」に、古川光明上席研究員が出席、今後の開発援助のあり方について、「Thinking together with a hands-on approach」の考え方が大切だと強調します。

[READ MORE](#)



### Reviews

## アジアにおける国家建設を議論するシンポジウム開催

「国家建設へのチャレンジ in Asia—開発協力における日独の国際的責任および役割」(主催=JICA、ベルリン日独センター、コンラート・アデナウアー財団)がJICA研究所で開催。日独の政界、外交・援助関係者、アジア諸国の有識者らが参加し、「人間の安全保障」「国家建設」に関して議論が交わされました。

[READ MORE](#)



## ブルキナファソ「みんなの学校プロジェクト」の インパクト分析

西アフリカ・ブルキナファソの「みんなの学校プロジェクト」を対象とする研究の準備のため、澤田康幸客員研究員が10月下旬に現地を訪れました。この研究は、ミクロ計量経済学的手法を用いてJICA事業の効果を厳密に検証しようとするもので、同研究員が代表を務める「JICA事業の体系的なインパクト分析の手法開発」研究のサブ・プロジェクトの一つです。

この研究プロジェクトの主な関心は、「学校運営委員会」という開発モデルの有効性を測定し、確かめることにあります。学校運営委員会(COGES)とは、地域住民や保護者が学校の運営にかかわるための組織を作り、学校運営や教育の質の改善をはかり、同時に住民・保護者と学校間の信頼関係を作ろうという試みです。委員会には、校長、教師代表、保護者会代表、母親会代表が参加します。

世界銀行なども注目しているこの開発モデルは、同じ西アフリカのニジェールでJICA支援のもとに試みられ、良好な結果を得て、いまや同国各地で導入されています。その経験を生かして、今年からブルキナファソにおいてもJICAが支援する「みんなの学校プロジェクト」として展開されることになりました。

澤田客員研究員の狙いは、同プロジェクトと連携し、プロジェクトの進展とともにデータの収集と分析を進め、効果や運営上の問題点などを多面的に洗い出すことです。具体的には、学校運営委員会が設置される前と後とで、教師や保護者の行動、児童の行動や能力などがどう変化したのか、しなかったのかといった点を丁寧に調査確認します。



ブルキナファソの学校でフィールド実験について説明する澤田康幸客員研究員(左)

この研究では、体系的にデータ収集を行い、「無作為化プログラム評価手法」という先端的な手法を用いて政策の効果を分析していきます。そのためのベースライン調査はすでに始められています。約280校の1年生から6年生の児童、その保護者、そして学校の校長・教員を対象としています。

来年には、地域住民の信頼関係を計測するために、実験経済学的手法を用いた「公共財実験」というフィールド実験を行うことも予定しています。

澤田客員研究員は、「単に『評価のために評価する』というのではなく、将来の事業改善に役立てる、さらにはJICA事業を通じて得られた現場の経験知を国際公共財として積極的に対外発信していくという視点に立った、前向きな研究を目指したい。事業と連動したこうした研究は、従来は困難であった研究であり、JICA研究所が発足したからこそ可能となった」と話しています。

## 古川上席研究員が開発援助の 多様性と補完性について発表

10月19日、フランス開発庁 (AFD) とドイツ技術協力公社 (GTZ) の主催で、「開発援助における多様性と補完性に関するセミナー」が、フランスのパリで開催されました。

本セミナーは、開発援助に関するドナー間の国際分業について対話を始めることなどが採択された、昨年9月の「アクラ・ハイレベルフォーラム」(ガーナ)での議論を継続するものです。JICA研究所からは、古川光明上席研究員が出席して、世界の開発援助に関する多様性と補完性についての現状認識や、今後の方向性について自身の見解を述べました。



古川光明上席研究員

同研究員は、「開発援助においては、依然として、各ドナーの比較優位が十分に考慮されず、援助活動の多様性や補完性が阻害されている。今後は、開発途上国政府の行財政改革を推進する『枠組みアプローチ』だけではなく、ドナー側と被援助国側双方の経験に基づき、共に考えながら

進めていく『Thinking together with a hands-on approach』の考え方も必要。そして、開発途上国側のオーナーシップを尊重し、被援助国が有する特有の国内システムを最大限に利用していくことが重要になる」と強調しています。

### Reviews

## アジアにおける 国家建設を議論する シンポジウム開催

11月7日、「国家建設へのチャレンジin Asia - 開発協力における日独の国際的責任および役割」(主催=JICA、ベルリン日独センター、コンラート・アデナウアー財団)と題するシンポジウムが、JICA研究所で開催されました。

冒頭、緒方貞子JICA理事長は、人間の安全保障の概念と国家建設との密接な関わりについて焦点を当てた基調講演を行いました。恒川恵市JICA研究所所長は、長年にわたり観察してきた東アジアの経験に基づいて、国家建設成功のための要因について語りました。

立場の異なる参加者による議論は、カンボジアやインドネシアにおける国家建設の経験から、アフガニスタンの国家建設という各国政府や国際社会が直面する困難な課題まで、多岐にわたりました。

[READ MORE](#)